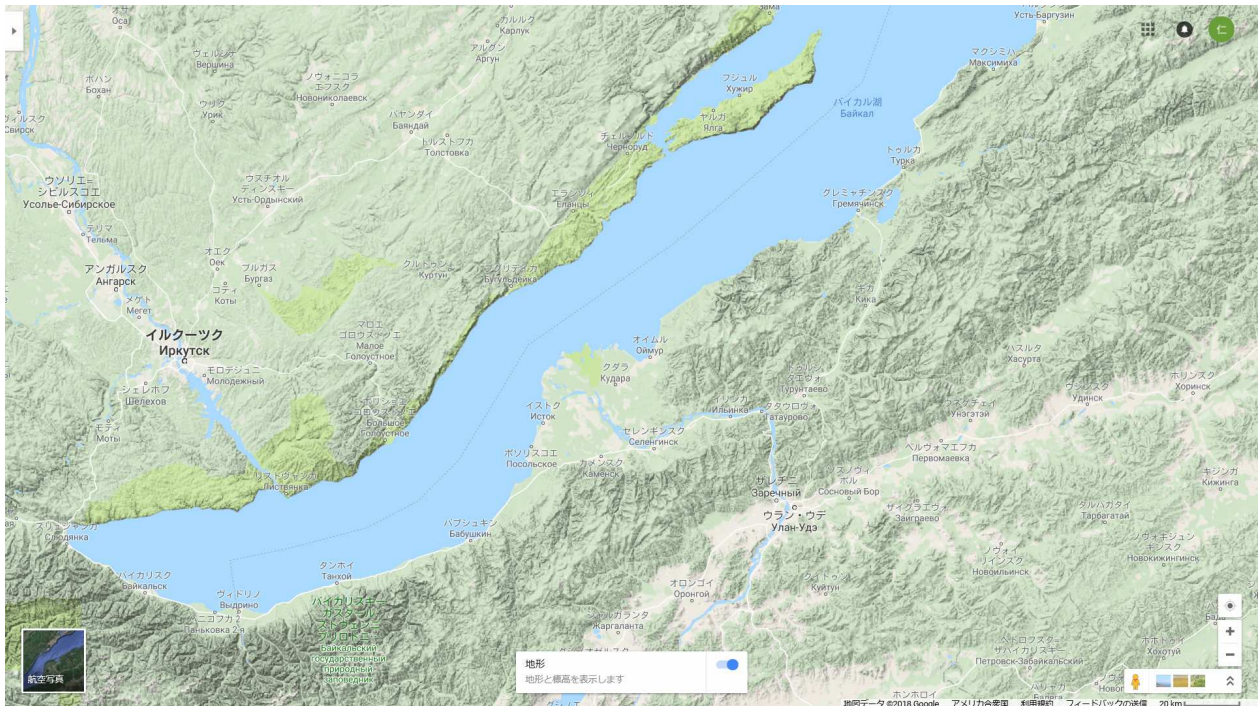


# バイカル湖 озеро Байкал ロシア共和国イルクーツク州他

バイカル湖の南岸を示す地形図 西南端近くから出るのはアンガラ川。下流にイルクーツクが見える。



バイカル湖は、ロシアのシベリアにあって、アメリカ・カナダ国境のスペリオール湖について大きく、1,500mを越えるその深さゆえ、世界最大の貯水量をもつ淡水湖と言われる。透明度も日本の摩周湖を凌ぐほどだ。私は、その美しい湖水を臨む地に行きたいとかねてから思っていた。

80年代後半、冷戦の渦中にあったソヴィエト＝ロシアは、ゴルバチョフ大統領の登場で、改革(ペレストロイカ)が叫ばれるようになった。私もソ連の改革に熱い期待をもった一人だった。変化するかの国を訪ねてみたいと、88年の夏、欧州旅行の経由地としてソ連への旅行を企画した。しかも、シベリア鉄道を走破したいという予てからの計画も盛り込み、いつものように欲張った旅となった。

## 新潟からイルクーツクへ

7月29日、新潟から空路で沿海州のハバロフスクに入った私は、翌日、バイカル湖観光の玄関口イルクーツクに、やはり空路で向かった。

この年、イルクーツク空港は滑走路が工事中で、滑走距離の短いプロペラ機でないと着陸できなかった。そのため、手前のソ連ブリヤート共和国の首都ウラン＝ウデの空港に降り立ち、そこで機を乗り換えて目的地を目指すことになった。この時のウラン＝ウデ空港での体験が今でも思い出される。午後の早い便で着き、がっしりしたいかにもロシア風な空港ビルに止まったのは、日本からの私を含む観光客十数人。通された応接室でじっと指示を待った。大きな窓からは周囲を見渡すことができた。市街地から離れた空港周辺は一面の草原で、そこに吹く緩やかな風は乾いた涼しい風で、肌に心地よかった。何しろ二日前までは梅雨空の東京にいたのだから、環境の変化に喜びを感じた。女性の団体客が多かったが、どうも話を聞いていると地方の小学校の先生らしい。外国は初めての人もいるらしく、少し緊張しているようにも見えた。他にやることもないが、かと言って饒舌になるでもなく、皆がこの不思議な異境の地の雰囲気浸っていた。がらんとした建物には人影もなく、こ

の地に住む日本人にそっくりなはずのブリヤート人にもお目にかかれなかった。3時間以上も待った。そうこうしている中に、窓から吹いて来る風が冷蔵庫の冷氣のように感じ始めた。外を眺めると、空気の透明感を感じるほど、冴えわたっていた。

ようやく出発の時に来て、現地の利用客に交じって搭乗すると、もうあの日本人の団体さんとは会うことはなかった。1時間弱で夜の帳が降りたイルクーツク空港に着き、送迎バスで市内のインツーリスト・ホテルに向かった。

ソ連の旅は何かと不自由がいった。この国通過の際、滞在日数毎に宿が指定され、列車も予約済でなければ入国を許されなかった。各地のインツーリスト・ホテルは外国人専用で、イルクーツクも例外ではなかった。当然、都心付近の便利な場所にあることが多く、その立地は明日の夜乗ることになる列車の発着駅、イルクーツク駅から歩ける場所にあった。

## バイカル湖へ

翌朝、早速バイカル湖観光の一日ツアーに参加するため、1階にあったインツーリストの事務所に寄ると、直ぐにオプションの券が発券され、急いでJTBの方たちと行動してくださいと告げられた。玄関に向かうと日本人の団体がおり、JTBのコンダクターとロシア側の通訳二人とが同伴していた。皆でバスに乗り込むと、早速アンガラ川沿いのすいた道をバイカル湖へ向けて出発。天気は快晴で、観光日和に恵まれた。途中、小高い丘の麓で少々休みとなった。その丘に登ると、白い幣に願い事を書いて樹木に結び付ける風習があるのか、灌木がその幣で白くなっているのを見た。シベリアの人々と我々日本人とは、同じウラル=アルタイ語の民族故か、共通性があるようだ。その後、アンガラ川からバイカル湖へと広がる、素晴らしい景色が見えて来ると、バスは間もなく目的のリストヴァンカという街に着いた。

まずは、素朴な農村に木造のロシア正教の教会があるというので、皆でそちらへと見学に出かける。こうした宗教施設を観光で訪れると言うのは、ペレストロイカが始まったからだ、コンダクターの女性から言われた。未舗装の農道のような道を伝って、会堂へと入ると、外観以上に内部も素朴な姿で、木製の聖像「イコン」ばかりが目立った。それにしても、この昼のさなかに冷蔵庫のような冷氣が地面をはって広がって来た。盛夏の季節でも、シベリアの気候は私たちに容赦しなかった。



写真1 夏のバイカル湖畔 水が透明なのが分かる

徒歩で戻り、さて今度は栈橋にやって来た観光船のジェット=フォイルでバイカル湖観光へと出かける。確かに景色は絶景だが、その舟では外に出られず、やむなくガラス越しに見ることになった。ところが、久しく磨かれていないのかガラスはまるで曇りガラスのように外の景色を曇らせた。暇を持て余し、隣に座る外国人の夫婦と話を交わした。英語がお上手ですねと話を向けると、チェコの職業外交官をしていると答えた。だから上手なんですねと応答すると、チェコのような大国にはさまれた小国では、外国と付き合うには自然と言葉がうまくなるのだ、と休暇中の外交官D氏は語った。その表情には、何かしら諦念のようなものが漂っていた。それから間もなくして、ジェット=フォイルは港に戻って来た。

上陸すると今度は、ロシア民謡を民族服をまとって歌う年配の女性たちの歓迎を受けた。旅行者が大勢来る日にでも歌うのか、プロではなく、アマチュアだったと思う。そして、演唱す

る歌は我々にもなじみの『カチューシャ』となった。歌えと言われなかったと思うが、誰からともなく皆で、日本語のカチューシャをロシア語の唄声にかぶせて歌った。同じ歌を、言葉の通じ合わない者同士が歌う。なかなか、普通ではあり得ない体験をしたようだった。中には、感動して涙を湛える日本人の女性までいた。

さて昼時となったので、近くの丘上にあるインツーリスト系のレストランに向かった。ところが、まだ準備が整っていないと言うので、コンダクターの女性によって隣接するバイカル博物館へと案内された。お世辞にも現代的な博物館とは言えず、見学客向けの施設にしては貧相な展示だった。資料館然としたその施設で見たものと言えば、湖で採られる貴重なたんぱく源の「オームリ」という魚位しか思い浮かばない。ようやく昼となった。通された席に座ると、私だけ単独での参加だったので、ガイドのオルガさんとリュドミラさん、それにツアコンの方とが集うテーブルとなった。

リュドミラさんと話したのは、どこで日本語を習ったのかという、通訳に問う定番の質問だ。ソ連では日本語を学べる学校が限られている。リュドミラさんの説明だと、日本語を学べるのは三つ。一つは私も知るウラディヴォストク大学の日本語科だが、残りはイルクーツク大学そしてモスクワ東洋大学だそう。リュドミラさんは東洋大学の出身だとか。今回はイルクーツク出のオルガさんの監督の立場なのでベテラン。JTBのコンダクターと、日本語での会話が上手だった。

帰りのバスで、若いオルガさんがマイクを持ち、ぎこちない解説をする。やはりまだまだ日本語習得は発展途上。その危なっかしい日本語を、ツアーの団体客たちが「大丈夫！ゆっくり話して」とか言って励ます場面もあった。往き来た道に戻るのだが、行く手の左に木造の建物が並ぶ一画があった。オルガさんの話によると、ここでミンクを飼育して豊かな毛皮をまとう成

獣になった時、毛皮として出荷するソフォーズ(国営農場)なのだとか。そう言えば、ロシア人がシベリアに入った時、ここでの通商は現地の人との毛皮貿易だったと、歴史では触れていた。それが今や産業になっていることに気付かされたわけだ。

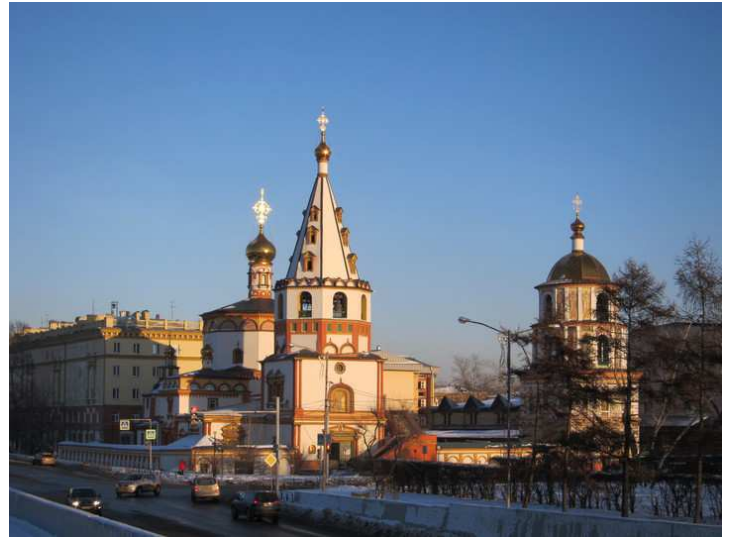


写真2 イルクーツク市内に復活した正教の聖堂

## イルクーツクの街で

帰りのバスで山形県から来たAさんと仲良くなった。自分が今夜の列車の出発まで身を置く場所がないと話したら、後でぜひホテルの部屋を訪ねてほしいと言われた。そうこうしていると、バスはイルクーツク市街へと戻って来てホテル前に止った。団体の方はまだスケジュールがあるらしく、一旦ホテル前で別れた。時間としては中途半端だが、せっかくの機会なので市の中心部に出かけてみた。イルクーツクは19世紀のデカブリストの乱※1の参加者を流刑にした街だそうで、その当時のモスクワやサンクトペテルブルクの建築様式が残されていると言われる。その華やかさから「シベリアのパリ」と呼ばれているが、確かにその雰囲気も備えていた。しかしあいにくこの日は日曜日で、歩いた場所が官庁街もあってか、人通りが少なく寂しくさえあった。

ホテルに戻り人懐っこいAさんを訪ねると、

彼の口からは言葉が溢れ出るように、その身の上話を聞くことになった。Aさんは山形県の中学の教員で、今回は急な参加で、こんな近くで遠い外国へと来てしまったと語った。何でも、直前に娘の結婚が破談になったとかで、その責任が自分に重くのしかかり、とにかくその逆境から逃避したかった。その時、同僚の伝手でロシア旅行の話があり、それに乗りやって来てしまったと言う。気持ちとしては重々理解できる話だった。海外に出ると、職場でのストレスから解放される思いだった私には、Aさんの訴える口調は、何か他人事とは思えなかったからだ。



写真3 イルクーツク市内を蛇行するアンガラ川

窓の外には、護岸のすれすれまで水位が上昇したアンガラ川が、早い流れとなっていた。その水の透明さから、水温が低い氷のような水が流れていると想像できた。ソファに横たわっていると、眠りが襲って来た。それで我に返り、Aさんに丁重にお礼を言いその部屋を離れた。フロントへと戻ると今度はここからシベリア鉄道西行きに乗り込む各国からの旅行者と一緒にになった。ここで初めて見る人ばかりだった。聞いてみると、中国の北京を発って今日で三日目とのこと。そうイルクーツクは、モンゴル経由でヨーロッパロシアをめざす旅行者がシベリア鉄道に乗り換える場所でもあった。

白夜の薄明に寂しさを感じる夕刻、バスに乗り、アンガラ川の対岸にあるイルクーツクの駅へと移動した。この年、極東地方のシベリア鉄道沿線は洪水で鉄道の運行にも支障が出ていた。そのせいで我々一行が到着した車両に乗り込めたのは、日付が変わった深夜となった。上下二

段の寝台のベッドに体を横たえたのは、さらに後となった……。モスクワまでの列車での旅は、その後四日間続いた。

了

※1 デカブリストの乱とは、19世紀前半、ロシアの遅れた体制を何とか変革しようと、軍の青年将校らが立ち上がり、結局は守旧派に弾圧されるという事件があった。彼らは、その前にナポレオン戦争に従軍し、進んだ西ヨーロッパを目の当たりにしていたのだ。